

聖書：第二コリント 12 章 1～10 節

説教題：弱さのうちに現れる恵み

はじめに

今日の午後から 2013 年度の予算総会が開かれようとしています。そのところでも話し合われることとなりますが、来年度の道標聖句に第二コリント 12 章 9 節のみことばを選ばせていただきました。

道標聖句を選ぶ作業は、たとえ言えれば大型客船の舵を取るのと似ているように思います。船は舵を切ったからといってすぐに曲がることはできません。時間がかかります。ですからあらかじめ針路を見定め、早めに舵の操作します。教会もこれと似ています。これからの一年の歩みがある程度見通して、あらかじめ今から備えることとなります。今回は、私なりに 2013 年度の進路を見定め、第二コリント 12 章 9 節のみことばを選ばせていただきました。

1 強さを誇る世界

コリントは、現在のギリシャの首都であるアテネの近くにある町でした。パウロは生涯に三度コリントを訪れ、教会を建てました。後になって、そのコリントの教会に異なった福音が入り込んでいるとの話を聞き、心を痛めたパウロがこの手紙を書いたのだとされています。

パウロは、2 節で「私はキリストにあるひとりの人を知っています」と言って、あたかも自分とはまったく別の人のことのように言うております。でも前後の文章を読むと、どうもこれはパウロ本人のことらしいの

です。

どうしてそのような回りくどい言い方をするのでしょう。その理由は 5 節にあります。「このような人について私は誇るのです。しかし、私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。」パウロはこんなすばらしい経験をしたことを誇ろうと思えば、誇れる立場にあります。しかし、パウロはそんなことよりも、自分の弱さを誇る決心をしたと言っております。

世間の常識はこれとまったく反対です。例えば、会社に就職しようとする面接試験があります。面接担当者はだいたいこんな質問します。「あなたの特技は何ですか。」「あなたは、この会社でどのように貢献したいと考えていますか。」面接を受ける人は、自分の能力の高さをアピールしなければなりません。そのためには普段から一生懸命資格を取ったり、ほかの人にはない強みを身につける必要があります。このように、今の時代は強さを誇る事が生きる基準となつてい

しかし、パウロは違いました。強さを誇るのではなく弱さを誇ると言い切ります。どうしてそう言えたのか。そもそも最初からパウロは弱さを誇る人だったのか。これから見て参ります。

2 肉体のとげ

(1) 目の病？

その前に、パウロが意識していた弱さとは

具体的にはいったい何であったのか。その事に少し触れておきます。7節に「肉体に一つのとげ」ということばがあります。パウロの弱さのことではあるのですが、しかしこれが具体的に何を指すかは書かれていません。唯一手がかりとなるのが、ガラテヤ4章15節です。「あなたがたは、もしできれば自分の目をえぐり出して私に与えたいとさえ思っていた。」このところから、多くの学者は、「肉体のとげ」というのは目の病気ことであると考えています。

(2) サタンの使い

それはよいとして、では「サタンの使いです」とはどのような意味なのでしょう。パウロはだれもが認めるすばらしい信仰者です。そんなパウロでも、サタンに打ち勝つことができずサタンの支配下にあって苦しんでいたということでしょうか。もちろん、そんなはずはありません。福音書を見ると、イエスは弟子たちに悪霊を追い出す権威を授けたと書かれています。イエス・キリストはサタンを完全に支配しております。では、これはどのように理解したらよいのでしょうか。

サタンの使いと言うと非常に悪いイメージがあります。しかし、不思議に聞こえるかもしれませんが、パウロはここでは積極的な意味を込めて言っています。誤解のないように言っておきます。サタンが働くのはよいことだと言おうとしているわけではありません。

8節には、「このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願った」とあります。パウロにとって、からだのある部分が弱いと言うことは耐えられなかったようです。何度も主に祈りました。しかし、祈りは聞かれませんでした。

祈れば聞かれるとよく言います。ところが、ちょっと悲しいことを言うようですが、このところを見てわかるとおりに、祈っても聞かれない場合があります。あのパウロでも祈りは聞かれませんでした。なぜなら、主の御心ではなかったからでした。パウロにとって、肉体のとげがいやされずにそのまま残されること、そのことで苦しみが続くことが主の御心でした。

一方パウロの側にしてみれば、祈っていても祈りは聞かれず、なぜ祈りが聞かれないのか、なんの説明はありません。説明があるのなら納得する気持ちにもなります。けれども何も説明がないと、不信感が湧きます。パウロにはどうしても、サタンが自分を苦しめているようにしか感じられません。

祈りが聞かれない理由を、主が明らかにされたのは大分時間が経過してからでした。主は次のように言われました。9節の前半。「私の恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである。」

パウロはこれを聞き、肉体のとげが与えられていることに、大きな意味があることに初めて気がつきます。自分が肉体のとげによって打たれること、そのことが実は神の栄光を現す。そのようにつながりました。

サタンがパウロを苦しめていたのではありません。けれどもパウロの実感としては、神がサタンを操作し、サタンを使って神の御栄光が現されていく。それで「サタンの使い」という言い方になったのだらうと思います。

3 弱さのうちに完全に現れるキリストの恵み

パウロと聞けば、皆さんはどのようなイ

メッセージをお持ちでしょうか。私にとっては、この人は近寄りがたい存在です。皆さんは、パウロの手紙を読んですんなりと理解できるでしょうか。聖書学院で学んでいる学生にも同じ質問をします。ほとんどの方は、難しいと答えます。日本語で読んででも難しい。原文を見てもっと驚きます。文章に全く無駄がありません。カミソリのように切れる頭の良さがにじみ出ております。論理の進め方を見てもどこにも隙がありません。

彼は、小さなときからエリート教育を受け、出世街道をまっしぐらに走ってきた人です。この世を生きていくためには、人よりも優れた能力を身につけ、強くなければならない。そんな人生観を徹底的にたたき込まれてきた人です。

彼がキリスト者になった後も、頭の中にあっただのは、自分の肉体が健康で強くあることで、キリスト教を多くの人々に伝えることができる。健康であることが、主の栄光を現すことになる。そのような信仰でした。ですから、「この肉体のとげを去らせてください」と祈ることに何も疑問を抱くこともなかったでしょう。

ところがやがて聞かされた主のみことばは意外なものでした。あなたは弱いままいなさい。なぜなら、弱さのうちにこそ主の力が完全に現れるのだから。強い所に恵みが多く注がれるのではなく、弱いところにこそ主の恵みが完全に現される。パウロにとって、それまでの生き方をどん底から覆すようなことばでした。

1 節でパウロは、「無益なことですが、誇ることもやむをえないことです」と言っています。なんやかんや言いながら、パウロは、自分の経験とか能力を誇りたいという願い

を押しえきれないでいる印象があります。パウロのように、持っている能力や才能が高ければ高いほどそれを誇りたいという衝動も強いのだと思います。

神は、パウロの弱さがどこにあるのかをよくわかっています。自分の強さを誇りたいという弱さがあることを知り、方ぶることがないようにと肉体のとげを与えました。

肉体のとげさえなければ、パウロはもっともっとすばらしい宣教の働きができたのに、と言うでしょうか。決してそんなことはありません。宣教の働きができないということよりも、神の前に高ぶることのほうが大きな問題なのです。だから、神はあえてパウロに肉体のとげを与えます。

4 弱さを誇る

主は、ときには私たちを弱いままにされることがある。そこだけ言われると、とまどう方もいるかもしれません。簡単には納得できません。そのことをどう考えたらよいでしょうか。

主ご自身のお姿から学びたいと思います。ピリピ2章6～8節にこうあります。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、師にまで従い、実に十字架の死にまで従われました。」

主ご自身がまず、私たちのために完全に弱くなられたことを覚えたいと思います。この方が十字架で死なれたとき、世の人々はそこに敗北しか見えませんでした。しかし、主は最も弱くなったときにこそ本当の恵みがあるのだと、ご自分の身をもって教えて下さ

いました。

あの頭の切れるパウロでさえ、最初はそれがわかりませんでした。自分が弱くされて、それで初めて主が弱くなられたことの意味を学びました。そしてこのように告白します。

「キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」

目の前にある自分の弱さを見たら、だれでも悲しみます。まして、弱さを誇りたい人などほとんどいません。強くあること、能力が優れていること、そのことを求めたくなります。そちらに幸せがあるように思ってしまうます。

そんなとき主は言ってくださいます。わたしの力は、弱さのうちに完全に現れる。弱さを嘆く必要はない。むしろ、喜ぶことができる。弱さを誇ることができる。もう弱さを隠す必要はありません。お互いの弱さを受け入れていくときに、キリストの恵みが現れていく。私たちの弱いところを、キリストの力がおおってくださいます。そのことを是非味わっていきたいと願わされます。